ヴエリングによってライデンのプランタン社から1608年に出版されました。この第2版、つまり、1618年出版のものが今回の本となります。

内容的には上で紹介したラテン語版とほぼ同じものとされており、以下おおよその内容の説明を致しますと、この本は第1巻第1部が総論となっておりますが、以下は、植物の名称のアルファベット順の解説書であり、第2巻は香りの良い花や花輪になるような植物、第3巻は主として根が薬用にされる植物、第4巻は穀物、豆類、水草などの植物、第5巻は食用となる植物や園芸植物など、第6巻は樹木の他に、(両) インドを含む外国の植物が主に述べられております。その記述に当たっては、現代の分類法からすれば問題はあると思われますが、厳密ではないにしても（花の）形態によって近種のものをまとめるなど、おおよそ科学的な分類の萌芽が見られるとされております。また、各植物の項目ごとに、種類、形態、生息地、花期、名称、性質、薬効、利用法、追記などの整然とした説明がなされております。こうした近代的特徴をそなえたシステマテックな説明の方法は後の植物誌のひな型となりました。

この本は度々申し上げましたように、大形のフォリオ版で、本文のみで1495ページの非常に立派なものであり、当時の専門家に彫らせた端正な図版も多く載せられていて、保存状態も良く、眺めているだけでも4百年の時を越え、かつての朴訥とした博物学者の情熱が伝わるように感じられます。ご来館の折に皆様がご高覧下されることを希望します。

（ひぐち　やすお　法学部教授　英文学）

永青文庫蔵雑記類より㈠

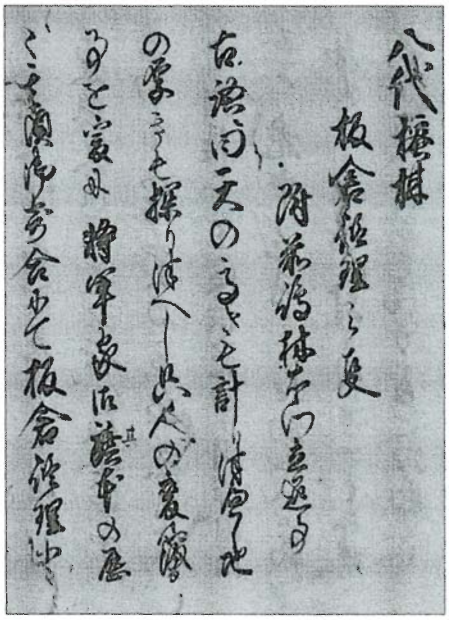
細川宗孝の死 (1)

西田耕三

熊本藩第七代の藩主であった細川宗孝は、延享4年（1747）8月15日、江戸城内において、旗本板倉修理に襲撃された。宗孝33歳、修理22歳。この事件は、馬場文耕の『近代公実厳秘録』や松崎観瀾の『窓のすさみ』、それらに依る芥川龍之介の『忠義』等によって知られるが、さらにこれらの原拠となった実録、あるいは記録類が多く書かれ流布していたことが高橋圭一氏によって報告されている（「板倉修理の刃傷」、「国語と国文学」、平成8年5月号）。永青文庫蔵の、『隠見細倉記実録』（写本、3巻1冊）、『八代榕柑』（写本、5巻1冊）も、この事件の記録・実録である。『隠見細倉記実録』の最初の条を引用して事件を紹介しておこう。(句読点引用者。一部表記を替えた)。

如毎例月次出仕之儀は、諸大名不残事也。扨大広間の面々は、兼て申合にも無之儀なれ共、高位の御方に候得ば、御上座宜く御間定り、諸侯出仕のうへ大目附見繕あり、御礼始り候事也。細川越中守殿毎之通座席に着座、其以後小用所に被参候処に、跡より来りし人や有けん、誰ともしらず抜打に首筋際に打懸たり。是はと思ひ給ふ内に、たゝみ懸て左の肩へ切懸たり。越中守殿も、我に覚る敵なし、全乱心人成べし、殿中と申とかく組伏ばやと思はれけれ共、其内手疵深ければ叶難く、如何せんとしばし立休らひ給ひし内に、誰いふとなく、小用所に大乱也と云声のしければ、御杉戸御番両人、御徒目附衆聞付け、早々御目附衆へ告ければ、大目附石河土佐守殿、御目附中山五郎左衛門殿其外追々馳集りて、土佐守殿、越中守殿江向ひ被申候処に、誰人共不知、誠に血に染みたる如くなれば、御家名はと問し時、たえ〴〵しき声にて、細川越中守と答ふ。誰人討かけしやと尋の時、越中守殿答られしは、誰共見分けず、上下着用の者なりとありしかば、夫より直に土佐守殿、御徒目付呼て、御坊主の分外へ散不申様に集め可置由、扨又御門〴〵を早速打せ申べし、其段達し候様にと、御目附衆より被申渡ければ、早速申通して、御玄関前御門より外、桜田迄の御門〴〵を打たりけり。越中守殿療治の儀は、詰合の御医師衆に被仰付之。夫より切懸し人有べしと、大勢相尋しに、ゑんの上に抜身の脇差あり。扨こそ此所に脇差あれば、此近所外へは行まじ、殊更無刀と見へたり、隈々を

（『隠見細倉記実録』巻頭）



（『八代榕柑』巻頭）

さがせよとて尋しに、小用所のすみに人あり。それより御目附御徒目附よびよせ、いかなる人ぞととはせしに、修理なりと答ふ。御目附衆被申しは、如何敷殿中も不憚かくの体は如何と被申ければ、修理殿被申候は、誰共不知自分へ切掛しにより、私事も討懸候となり。扨其元の髪は何とて切被申候哉とありければ、人をあやめ立難く存候故、髪を切申候。それは何と(にか)て切被申候哉。其節修理殿被申候は、懐中の鋏にて切しと答へ給ふ。全乱心と見えし上は、御徒目附立寄、蘇鉄の間脇小部屋へ入置、御徒目附衆其外御小人目附付置るとなり。

修理が乱心していたこと、宗孝にとっては何のいわれもない横難であったことから、後に、修理と板倉一族との角逐、細川家の凶兆が物語として付加されていくのだが、『隠見細倉記実録』の記録はまだそれ以前の段階のものである。本書はこのあと、宗孝の退出、修理の水野監物への預け、小用所付近の絵図、大目附御目附衆よりの書上、宗孝の手疵の様子、宗孝と懇意の御城坊主の名前、修理親類の処置、８月16日の宗孝の死とその法名（実際は即死に近かったようである)、８月23日の修理の切腹等を記す。物語化は進んでいないが、いくらかの感想は書きつけられている。襲撃された宗孝は、目附衆にむかって、「殿中の儀に候得共、事を奉憚、相慎候故、心外に所々手疵を負申候」と語った。これに関し、「誠に越中守殿大勇にして、慎みの難成所を慎み被申候事、貴賎感じ入しとなり」と言い、事件を知った細川上屋敷の家中が残らず下馬へ駆け付けたことを「尤至極」と言い、宗孝退出の際、玄関迄迎えに来た家中の中に旧臣とみえる老人が人参をもってかごに立寄り悲しむ体（後に、松江清太夫として物語化される）を「家中の面々の心の中察いられ待る」と語り、修理の三田の屋敷は、もと有馬伊予守の居屋敷だったのを伊予遠島により召し上げたもので、「誠に不吉の屋敷之由也」と記す。

本書には筆記者名も年時も書かれていない。蔵書印は、永青文庫の他に「時習館」と「記録局」。記録局は時習館の一部局で、安永８、９年の頃からそう呼ばれていたようだが、筆記年時の推定の根拠にはならないし、記録局で作成されたという確証もない。細川家中の誰かが、出廻っている記録、実録類から取捨し、記録の部分を再編して作ったものではなかろうか。

『八代榕柑』は、ほぼ『近代公実厳秘録』に依っている。

この事件に関し、江戸藩邸の『日記』の延享４年８月23日の条に、本多伯耆守（老中）が細川一族の織田山城守に伝えた「板倉修理殿今暁切腹被仰付候」という言葉と、同27日の条「隆徳院様（宗孝）今朝五時御出棺被遊、御葬送相済候事」という記事、及び以降の法事の記事がみえる。

なお、永青文庫には、以上とは別に、『延享秘録』という本がある。次回はこれによってこの事件とその周辺について、さらに詳しくみてみることにしよう。

（にしだ　こうぞう　文学部教授　国文学）